
グレートランド・マカロニ奇譚

野井 之一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレートランド・マカロニ奇譚

【Nコード】

N9042Y

【作者名】

野井 之一

【あらすじ】

アスカはグレートランドのそこそこ腕の立つシェリフ（保安官）だ。

彼女はある日、最年少シェリフのチャールズを上司から押し付けられ、彼と共に仕事をする事になったが、彼はなんとも扱いにくい屁理屈少年だった。

なかなかうまくいかない二人の前に巷で話題のラッキーストライク強盗団のリーダー、フィンが現れ、アスカの周りはめまぐるしく変化していく。

荒野のシルバースター？（前書き）

この物語は西部劇風であって、西部劇ではありません。

荒野のシルバースター？

広大な面積を誇る、とある大国の『開拓時代』と呼ばれた夢と自由、金と銃が溢れた時代。

これは、そんな時代の歴史の教科書にも載らないような、閑古鳥が鳴く歴史資料館の、古びた資料のはじっこ、たった数行の記述の行間に詰まった物語である。

*

始まりは冷たい風の吹く、暗い日だった。昨日までは風のない温かな陽気だったにも関わらず、今日は風が乾いた土を巻き上げ、視界はほとんど黄褐色に包まれていた。

アスカ・スウィートフィッシュはそんな荒野で砂に怯んでいる情けない愛馬の手綱を引っ張って歩いている。砂嵐から彼女を守るはずのマントはバタバタと音を立てながら煽られ、ほとんど意味をなしておらず、胸元に輝く銀の星が見え隠れしていた。

彼女は砂埃に目をやられ、目に涙を浮かべながらも、ようやく家屋が立ち並ぶ場所までやってくると、馬を馬屋に繋いで建物の中に入ってしまった。

中には少し太った中年男性　マードックが座っており、彼はアスカを見るなり笑って見せた。アスカも柔らかに笑って見せると、マードックの横にあった椅子に座り、上着と帽子、重々しいピストルが収められたガンベルトをテーブルに置いた。

「お疲れ」

マードックはマグカップにぬるい水を注いでアスカに渡した。彼女はそれを受け取ると一口飲んで、ふうと一息ついた。

それから水をかぶった犬のように頭をブルブルと横に振ると、彼女の黒くて長い跳ねっ毛から大量の砂が音を立てて床へと落ちてい

った。マードックはそれに嫌そうな表情を浮かべることがなく、また、アスカも特に特別な反応を見せることもなく、たわいない会話をしていた。

会話に区切りがつくと、アスカは立ち上がって箒を取ってきて、その砂をそのまま外へと掃き出し、再び椅子に納まった。

「そーいや、連続牛泥棒を捕まえたんだって？」

マードックは興味津々にアスカに尋ねると、彼女は少し照れくさそうに笑って頭を掻く。ふるい落としきれなかった砂が、また音を立てて床に飛散した。

「ええ、マードックさん。なんとか捕まえることができましたよ」アスカはまた箒で砂を外へと掃き出しながら言った。

「お手柄じゃないか！ 君はシェリフの鏡その物だ！ 私もあと十年若けりゃ、そこらのアウトローにギャフンと言わせてやるんだがなあ！」

マードックは大きく口を開けて豪快に笑い、アスカはそれに「大げさですよ」と控えめに答えた。

彼等はシェリフだった。

広大な大陸全てを国土とする、巨大な国 『グレートランド』をいくつかに分割した『州』、またはそれをさらに分割した『町』、『村』と呼ばれる区画間を渡り歩いたり駐在したりして、殺しや強盗などの犯罪行為を行う『アウトロー』から善良な州民を守るのが彼等の仕事だった。

一見、アスカにはそんな仕事が勤まるようには見えないが、彼女は父が伝説的なシェリフだったこともあって、そこらの男よりは銃の扱いを知っているし、ケンカができないような、しおらしい娘というわけでもなかった。

「さて」

急にマードックが真面目な表情になった。

「お前も一人前になったことだし、そろそろ部下の一人や二人、必要だと思っているのだが……」

マードックはそう言つと、トントンと指で机を叩きながら言った。アスカは彼の突然の話にキョトンとした表情を浮かべた。

「部下……ですか？」

アスカは自分の聞き間違えではないかと思い尋ね返すと、マードックは深く頷いた。

「ああ、そうだ。ほら、聞いたことはないか？ 最年少でシエリフになった少年さ。この間の新聞に載っていた……」

最年少でシエリフになった少年　アスカは数日前に新聞で読んだ記事の内容が頭を過ぎった。

なんでも、神童と呼ばれるほどの頭のいい少年で、しかも州の有力者の推薦もあつて、十五歳でシエリフになった　そんな感じの内容だつたはずだ。

「その人が私の弟子に？」

「ああ、そうだ。他の者には子守りは職務外だと断られてしまつてね。かといつて、ほら……『アイツ等』に任せるつていのはありえないだろう？」

マードックが少し不快そうな表情を浮かべて言った『アイツ等』というのはシエリフという立場を利用して、アウトローに手を貸したりするような素行の悪いシエリフのことだった。

シエリフは拳銃の実力と少しでも権力のある人物からの推薦さえあれば就業できるために悪人がシエリフになつてしまうことは珍しくないうえに、その数は少なくなかつた。

また、彼らのような存在が、州民のシエリフに対する感情を日々悪くしている原因でもあるゆえにマードックのような真面目で誠実なシエリフは彼らと常に睨み合つていた。

ともかく、アスカは少し悩んだ。

マードックの頼みを断つたシエリフたちの意見にアスカ自身も賛同するし、シエリフの仕事はアウトローを捕まえることで、安全な仕事であるとは言えない職業だ。今日の馬泥棒を捕まえるときも銃撃戦があつたのに、そんな場所に子供を連れて行って使えらとも思え

ないし、なにより危険だ。

アスカはどうかして断れないものかと考え込んでいた。

「あの、その少年には事務所の仕事をやってもらうっていうのはどうでしょう？　頭のいい少年であれば処理も早い、きっと適任でしょう？」

アスカの提案に、マードックは首を横に振った。

「その少年は物好きなことに『現場』をご所望でね」

シエリフというのは実力と推薦があればなれるが、初めは地元 of シエリフ事務所の雑用から始まり、ある程度の荒事を経験した後に事務と駐在専門のシエリフか巡回専門のシエリフになる。アスカのように巡回シエリフになれば実力のあるシエリフの助手になって色々経験させられる。

それが終われば自分の意志で仕事をすることが許される。一人、もしくは仲間と狭い範囲を移動する。村から村、町から町。実績をあげるほど任される範囲は広がり、最終的には州間を移動する仕事を任される。希望すれば本部の仕事に移ることさえ可能だ。

この仕事は実力主義だ。だから入ってきたばかりの、しかもまだ実績の一つさえあげたことがない子供がいきなり重要なプロセスを抜かして『現場』の職務につくことはない。アスカだって、ほかのまっとうなシエリフだって、最初は雑用から　そうして『今』があるのだ。

「マードックさん、その少年を優遇しすぎなのでは？」

「うーむ……実を言うと、『例の少年』の親御さんは……その、あれだ……私たちに色々便宜をはかってくださっている方のご息なんだ。だから、その……」

ああなるほど。

アスカは納得した。納得はしたが、子供の面倒はごめんだ。だが、『アイツ等』にまだ純粋な子供を預けるくらいなら、アスカは定年間近の彼の頼みをきくことにした。

それに、きっと、その少年はヒーローになりたいだけなのだろう。

一度くらい銃撃戦を経験すれば、泣いて両親のところに戻るに違いない。そう思ったからこそ、引き受けようと思った。

「分かりました。その少年は私が預かります」

アスカは嫌そうな表情をできるだけ表に出さないようにしながら、席を立ってガンベルトに銃を入れると、帽子と上着を持って、小さくさと外へ出て行ってしまった。

2011・11・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042y/>

グレートランド・マカロニ奇譚

2011年11月27日01時52分発行